

理事長 富澤 暉

11月号に書いた「愛国心の教育」を何人かの友人に送ったところ、賛否相半ばする返事が来た。私自身が何十年と悩んだものなのだから当然でもある。

140年前の福澤諭吉が言ったように、「国が小国として、臥薪嘗胆の瘦せ我慢をしている時には国民も愛国心を持たざるを得ないが、国家が安泰である時には、国民は愛国心を持たずに済む」のかもしれない。

1970年11月25日（愛国忌）の三島・森田両烈士の魂魄を継承するため、72年に創設された「一水会」という思想団体がある。その会の代表と顧問を永年務めた鈴木邦夫氏（74歳）は「僕は純粹な意味での愛国心は必要だと思っんです。例えば謙虚な民族だったことが素晴らしいとか、日本の日記文学は素晴らしいとか。でもそれは心の中で思っていればいい。僕は『日の丸』『君が代』は好きだ。ただ、学校などで強制されることには反対だ。愛国党の赤尾敏さんは『日の丸、君が代は大人が大事にして見せたら、子供はそれを見て、ならう』と言っていた。

大事だと思う大人が、たとえば国会議員が国会で毎日、日の丸の前で「君が代」を歌えばいい。（マガジン9『鈴木邦夫の愛国問答』より）」と言っている。これには私も全く同意である。

愛国心というものは教えられて覚えるものではなく、各個人の永年の生活の中から自ずと発するもののように思える。米国でも最近アメフトの試合で国歌斉唱の儀式に不同意を示す選手が出て問題になったと聞く。人種の坩堝のような国柄だから、これは中に変である。

二十数年前、ジョン・F・ケネディー米35代大統領の墓（アーリントン・ヴァージニア）の前に「国家が貴方のために何をするかではなく、貴方が国家のために何ができるかを問え」という英語の文言が石壁に彫られてあるのをこの目で確認した。これは、1961年の大統領就任演説の一部なのだが、それに続いて「世界の仲間たちへ」と呼びかけ、「米国が貴方のために何をするかでなく、我々が共に手を携え人類の自由のために何ができるかを問え」と続けられているという。

つまり、「個人と国家の関係」だけではなく「個人と国家と世界の関係」にまで及んでいたのである。国家主権を担う我々個人が、国家や世界の為に果たすべき義務・責任を56年ぶりに我が身に問うべき秋のように思う。